

食事の問題 多職種で改善



島区にある特別養護老人ホームの食堂で、月1回の「ミールラウンド」が始まった。ある入居者が食べる様子を、介護福祉士や管理栄養士、歯科医師ら専門家が確かめ、改善策を話し合う取り組みだ。

2月上旬の昼、東京都豊島区にある特別養護老人ホームの食堂で、月1回の「ミールラウンド」が始まった。ある入居者が食べる様子を、介護福祉士や管理栄養士、歯科医師ら専門家が確かめ、改善策を話し合う取り組みだ。

この日の対象は、86～103歳の6人。いずれも軽度から中等度の認知症がある。入居者の女性(92)もその一人。昨年末に体調を崩して入院した。病院食は、おかゆや食材をすりつぶしたものだった。退院して特養に戻っても、同様の食事を出していたが、徐々に回復してきたため、ミールラウンドに合わせ、久しぶりに形のあるおかずや軟らかいご飯をとることになった。

女性は、食事を出されても、すぐには箸をつづけず、入れ歯を

いた。女性は、食事を出されても、なかなかご飯をとることにならなかった。女性は、食事を出されても、すぐには箸をつづけず、入れ歯を

いた。黒田さん(手前右)は、管理栄養士の黒田亘一朗さん(52)がかかる。管理栄養士は「好物の麺類なら立を作る管栄養士が「少しうまく切って出します」と応じた。

東京都健康長寿医療センターリサーチ員で歯科医師の枝廣広や子さんによると、認知症の人は、食事を出されても、すぐに食べ始めない

痛みや不快さをうまく伝えられないことも影響する。歯の痛みや入れ歯の不具合に加え、服がチクチクする、座るとお尻が痛むなど食事面での気がかりがある入居者が食べる様子を、介護福祉士や管理栄養士、歯科医師ら専門家が確かめ、改善策を話し合う取り組みだ。

この日の対象は、86～103歳の6人。いずれも軽度から中等度の認知症がある。

歯科医師会「あぜりあ歯科診療所」の協力歯科医師、黒田亘一朗さん(52)がかかる。この日の動き、声のかすれの有無などを確認した。

「のみ込みは大丈夫。この硬さに変更しても問題なさそうですね」黒田さんの意見を聞き、一緒に回った特養の職員たちの表情が和らいだ。介護福祉士は「好物の麺類なら食事が進むかも」と提案、献立を作る管栄養士が「少し短めに麺を切って出します」と応じた。

東京都健康長寿医療センターリサーチ員で歯科医師の枝廣広や子さんによると、認

りしているほか、周りの音や光の具合で、食事に集中できないこともある。

痛みや不快さをうまく伝

えられないことも影響す

る。歯の痛みや入れ歯の不

具合に加え、服がチクチク

する、座るとお尻が痛むな

ど思わぬことが、食べない

原因になつたこともあると

いう。

枝広さんは、「何が食事の妨げになっているのか、

歯科医がかむ力やのみ込む力を的確に評価した上で、

様々な方面から探ることが重要です。解決には、多職種が携わるミールラウンドが役立ちます」と話す。

介護施設でミールラウンドを実施する場合、あらかじめ計画を立てながら要件を満たせば「経口維持加算」という介護報酬を得られる。厚生労働省によると、2018年度は特養の24%、介護老人保健施設の48%で、この加算が算定され

ていた。高齢者の食事の楽しみを守る活動は、徐々に広がっている。

（画像は一部修整しています）

初診患者 口内もチェック

2019年秋、神奈川県

はひどく、歯垢もびっしり
付着、何本かはぐらついて

いた。

横須賀市の女性Bさん(88)
は、神奈川歯科大病院(同
市)で歯科医師の井上允
さんに、口の中をチェック
してもらった。

この日、Bさんは、同病
院の「もの忘れ外来」を受
診し、認知症の検査結果を
聞いた。幻視な

どを起こす「レ
ビー小体型認知
症」だという。

診察した認知症
の専門医、眞鍋
雄太さんから

「認知症と口の
中の状態は関係
がある」と分かっ
てきています。

歯科医師にも診
てもらいましょう」と促され、
同じ3階にある

歯科に出向ぎ、
歯周病が判明し
た。歯肉の腫れ



もの忘れ外来で眞鍋さん(左)の診察を受け
るBさん。終了後、歯科外来へ向かった(神
奈川県横須賀市の神奈川歯科大病院で)

んは「歯科も、認知症の人
の生活の質の向上や、症状
改善に役立てる」と力を込
める。

ここ数年、口の中の状態

と認知症を関連づける研究
成果が相次いで発表さ
れており、歯周病がアルツハイ

マー病の発症を招く可能性
を示唆する動物実験や、健
康な高齢者の口の中を清潔
に保つことで注意機能が改
善するという報告などだ。

Bさんは今、同病院で認
知症と歯科、それぞれの外
来に通う。医科と歯科の診
察内容は、電子カルテで共
有される。「食事の拒否が
あった」、「入れ歯を紛失。
物を隠す症状の可能性があ
る」などの情報を同時に把
握することで、Bさんに起
きている問題の迅速な改善
につながるという。

もの忘れ外来の初診患者
には、認知症のため、口の
症状をうまく訴えられず、
歯科を長らく受診していな
いケースが自立つ。歯科医
がチェックすると、Bさん
のように、歯の治療が必要
とされる人が多い。井上さ

日本老年精神医学会や日
本補綴歯科学会などは21
年、認知症と歯の症状の関
連を科学的に研究する共同
プロジェクトを発足させ

た。メンバーでもある眞鍋
さんは「研究で医科と歯科
の連携を進めながら、一緒に
認知症患者の診療にあた
る取り組みを広げていきた
い」と話している。

「口から食事」へ訪問診療

認知症と歯科

5/5

「歯科の訪問診療のおかげで、もう一度、大好きなケーキや果物を食べ、笑うことができた」

東京都葛飾区の熊谷恒夫さん(80)が、2019年7月にみどりた妻、児子さん(享年76)の晩年を振り返る。恒夫さんは60歳代で進行性の病気で全盲となり、外出の介助を受けながら、認知症がある妻を介護していた。

児子さんは17年2月の入院をきっかけに、食事の介助を拒み、口を開けなくなつた。やむを得ず、鎖骨近くの血管に管を入れ、24時間の点滴で栄養をとつた。

退院して間もない4月、訪問診療医の依頼で、寺本内科・歯科クリニック(文京区)の歯科医師、寺本浩平さん(48)と、歯科衛生士の佐藤和美さん(52)が訪ねてきた。口から食べられるかを確かめるためだ。児子さんは終始、険しい表情。寺本さんの手を払い、「いや」と叫び続けた。

まずは週1回、口の中を清潔にする「口腔ケア」から始めることになった。

ケアを嫌がる人は、口腔内の感覚が過敏になつていて可能性がある。佐藤さんは訪問時、児子さん

の頬を優しくマッサージし、唇、頬の内側、歯茎と、触れる範囲を広げていった。心を開いてもらう工夫も重ねた。恒夫さんから、児子さんが長年、幼稚園や学童保育で働いていたと聞き、ケアの間童謡を流して恒夫さんに手を握ってもらつた。スマートの画面で子どもの写真を見せ、児子さんの表情がぱっと笑顔に変わつたこともあつた。

1か月たち、児子さんが口を開く

状態を慎重に確かめながら、徐々に元の食事に戻した。寺本さんは「食べられなかつたのは、歯や嚥下の問題ではなく、食欲の喪失や食べ物をうまく認識できることが原因だろう」とする。認知症の人には自立ケースという。

18年5月、児子さんは胃ろうを作つた。1日2回の食事と、胃ろうで栄養を補う生活になつた。

鎖骨近くの点滴が外れたため、週1回1時間、夫婦それぞれの介助者の付き添いで散歩した。恒夫さんは、下校中の小学生に「元気そうね」と話しかけた児子さんの弾む声が耳に残つている。

食事が細くなつた高齢者には通院が難しい人も多く、訪問歯科診療の重要性が増している。高齢者の食事支援に詳しい日大歯学部教授の植田耕一郎さんは「認知症の人、安全に楽しく口から食べられるように支援するには、一人ひとりの人生をひもときながら、心を通わせるプロセスが欠かせません」と話している。(影本菜穂子)

(次は「足の病気」)



佐藤さん(左)と熊谷さん夫婦。
訪問を重ね、児子さんの笑顔が
戻つた(2019年)＝寺本内科・歯科クリニック提供